

障害者支援施設における就学支援

～ 60 歳代と 50 歳代の高校 3 年生 ～

都道府県：福岡県

会員施設名：カーサ陽だまりの里

発表者氏名：中野 愛美

I. 実践の目的・ねらい

障害や家庭環境などの理由により、幼少期に学校へ通えなかった方に対し、学齢超過者の就学を支援する制度があることを知り、ご本人の希望と熱意を受け、地域の特別支援学校と連携を図り、新たな世界を広げるための支援を進めている。

学校に在籍することにより、学習面はもちろん、様々な行事や集団活動を通して、人と人との繋がりや学ぶことへの楽しみを知り、新たな生きがいをご自身で発見されることを目的としている。

II. 実践方法・取り組んだこと

週 3 回の訪問学習を基本に、施設内でのマンツーマン授業が実施されている。また、言語での意思疎通が困難な方については、施設職員と担任の先生との間で連絡ノートを活用するなど、最近の様子や授業中の様子などを伝達し合っている。

その他、特別支援学校で行われている入学式、卒業式、運動会、学習発表会、宿泊学習、修学旅行等にも施設職員が同行し参加している。また、始業式および修業式等については、学校教職員（校長、担任）および施設職員も出席し、施設内にて開式している。

III. 実践の結果

小、中、高等部と進学をしていく中で、新たな世界が広がっていくことを日々実感されている。施設内には、学齢超過者支援を利用した卒業生も生活されているため、学習に対する意識を互いに高め合う環境もできてきている。

課題としては、授業の準備や後片付けなど職員の支援量の増加、修学旅行への付添い等はあるが、ご本人が学校教育を通して感じた学ぶ楽しさや他生徒と活動する際の生き生きとした姿は、ご本人はもちろん施設および学校も含めて高く評価している。

IV. 分析・考察

学校へ通うことにより得ることのできる学ぶ事や知る事の楽しさ、仲間と共に目標を達成する喜びや感動など、私たちが普通に経験してきたことを 50 歳を超えた今ようやく経験されている。人生の先輩にあたるお二人に対して、私たちが支援出来る事は何かということをもより深く考えながら、共に楽しみ、喜び、悩みながら、本実践を継続していきたいと考えている。

あなたらしい最期と初めての尊厳ある看取りの支援について

～ 看取りの見取り図 ～

都道府県：愛知県 会員施設名：戸田川グリーンヴィレッジ
発表者氏名：桂川 恵輔、中村 敬子

I. 実践の目的・ねらい

近年、在宅や施設での看取りが増加している中、終末期を住み慣れた環境で過ごしたいと願う利用者に寄り添い、施設として初めて看取りを経験した事例である。

当施設では、利用者の体調悪化時や終末期はかかりつけ医と連携し、医療機関での対応が中心であった。今回は病院ではなく施設に居たいという本人の強い希望が支援方針の変化をもたらした。施設としての成長や課題を分析し、今後もその人らしい終末期に寄り添える支援に繋げることを目的とする。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 支援員会議、各職種参加会議を開催し、本人の希望に添った支援方針を検討。
2. 職員が看取りについてのグループワークを実施し、近隣施設での看取りマニュアルや看取り体験談を情報共有した。
3. かかりつけ医と連携を図り、緊急時の特別往診対応や親族へ病状の変化に応じたインフォームドコンセントを設定。
4. 看取りフローチャートを作成し、緊急時の対応方法の周知を図る。
5. 施設職員対象に看取りについて率直な意見をまとめる為にアンケートを実施。
6. 役所や葬儀業者との連携を図り、他利用者が動揺しないように配慮する。

III. 実践の結果

1. 当初は病状コントロールのため水分・食事・おやつ等の制限が厳しかったが、かかりつけ医からの施設看取りをバックアップするという励ましによって、制限の緩和に踏み切れたことや、希望に添った特別外出ができたことがきっかけになり、施設職員に理解が広がり関わり方の変化がみられた。
2. グループワークでは、初めての看取りに対する不安や心配の意見が多かった。
3. 医師からの的確な指示や病状説明により、状態悪化の理解と受容ができた。親族の複雑な心境も受けとめられた。
4. 全ての職員が看取り当日に同じ行動ができる手順が確立し、不安が軽減された。
5. アンケート結果は、本人が望む生活に寄り添い看取る事が出来たと前向きな意見や、職員のメンタルケアの必要性や業務負担増の問題提起等様々な意見があった。
6. 深夜の看取りとなったが、関係各所連携が図れ、他利用者への配慮もできた。

IV. 分析・考察

実践した結果、職員は不安を抱えながらも、施設で看取りを行うという覚悟や気持ちの整理をする糸口ができ、本人が望む施設生活を尊重しようとする言動に繋がった。最期には本人から「ありがとう」と感謝の言葉をたくさん残していただけたことが良い経験になった。課題としては、①看取りが可能なケースかどうかの判断②職員のメンタルケア、業務のフォローアップ体制の検討、看取り教育③家族や関係者への細やかな対応が挙げられた。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。

個別外出支援の機会均等と意思決定支援

～利用者の生きがいと職員の働きがい改革を目指して～

都道府県：栃木県

会員施設名： 障害者支援施設 ひのきの杜

発表者氏名：秋澤 慎也 藤平 香奈

I. 実践の目的・ねらい

外の世界の空気や景色は、季節を直に感じ、様々な刺激を与えてくれる。そこには人とのふれあいも生まれ、みんなを生き生きとさせる。しかし、自分の意志で外部サービスを利用し外出する利用者がいる中、(医療) 重度化や高齢化、障害特性、経済面等により、外出の意向、判断の難しい方が増えてきた。誰もが外の世界を楽しめるように、支援体制が組めないかという思いが職員の中で強くなった。

利用者ニーズに応えるべく、個別性や自由度、平等性(機会均等)を確保し、利用者の意思決定を大切にしたい外出支援体制作りに取り組む。そして、職員は共に外出を楽しみ、福祉のやりがいを感じながら、意思決定支援及び人権意識の向上に繋げていく。

II. 実践方法・取り組んだこと

1. 選択性のあるグループ外出、イベントで使用する買い物外出支援の実践
2. 意思表示困難な方の意思決定と健康状態に波のある方への外出支援の実践
3. 外出支援のルール作り(個別性、平等性の確保)
4. 職員配置を上手く活用した外出支援の定着化を図る雰囲気作り

III. 実践の結果

1. 施設行事として春と秋に分け、小グループでの外出支援を行った。個別性や適正な時間配分等、改めて外出支援に対する課題や、ニーズを把握することができた。
2. 日頃より体調に波があり予定通り外出できない方を対象に、当日判断にて外出する体制作りにつながった。また、意思決定において、好みや生活歴、家族の思い等を反映する事で楽しい外出に繋がり、意思を尊重する姿勢を学ぶ機会にも繋がった。
3. 支援による外出のルール案を利用者、職員に提示し(年間で使用できる時間、1回に使える時間、職員配置に影響されることもある等)、皆で考えていく姿勢を持つことが出来た。日頃より、障害特性を理解している支援員が同行する事で、自閉傾向のある方も安心して楽しく外出することができた。
4. 外出支援体制を構築する事で、職員配置にゆとりのある時間を活用し、昼食を食べに行く、近隣に買い物に行く、ドライブに行くといった職員間の雰囲気、風土になってきた。機会均等、平等性、柔軟性を確保できたことで、利用者から満足の声が聞かれている。職員からも、ニーズに対応できる環境が整った事で、利用者と共に楽しみ、やりがいを感じながら「利用者本位の支援」を考える機会にも繋がった。

IV. 分析・考察

実践を通して、「外出したい!」という利用者の想いを改めて感じ取ることが出来た。外出先でしか見られない利用者のキラキラとした表情は、職員のやりがいにも繋がった。個々の特性に合わせた意思決定支援を通して、障害特性や本人の意志、生活歴(歴史や人生)などから見えてくる「本人らしさ」とどう向き合うかが、支援の大変さであり面白さでもあると感じた。今回は外出というテーマであったが、他分野においてもその面白さを追求し、利用者と一緒に楽しむことのできる支援環境を構築し、そして人財育成に繋がっていきたい。今回の外出支援を通して、利用者、職員の気持ちの変化を言葉やグラフとして評価し活かす事で、これからの『支援の質の向上』に繋がっていく。

※事例等の使用は利用者本人(家族)の承諾を得ています。

日々の外出支援

都道府県：神奈川県

会員施設名：リエゾン笠間

発表者氏名：三林 大祐

I. 実践の目的・ねらい

利用者からの外出の要望は高いという事もあり、利用者一人に対して外出の機会を提供する。外出をすることで、地域に障害を持っている人が生活していることを近隣の地域住民に知ってもらい、地域との関わりを深めていく。

欲しい物を買に出かけるということ、「普通」であるということへの取り組み。

II. 実践方法・取り組んだこと

日中活動を担当する部署が提供する。

月に一度外出の予定表を作成し、入所している利用者全員に2時間の外出の機会を提供する。

予定表の作成の際には都合の悪い時間帯や行きたい場所、買いたい物など事前に聞き取っておく。

III. 実践の結果

タクシー券の利用など社会資源を有効に使うことで、生活の幅を広げていくことが出来ることを知ることが出来た。

2時間の外出では、買い物も慌しくなってしまう事もあり、もっと長い時間での外出が求められている。外に出かけたい意欲は一層強くなっている。

取り組みから4年ほど経過したが、今では生活の一部として当たり前になっている。

IV. 分析・考察

身体に障害を抱え不自由な利用者だが、外に出たいと思っている利用者は多く、日中活動のどんな活動よりもニーズは高い。外に出かけるということは何より楽しみであり、刺激を得られることなのだと思う。

月に1度2時間の外出は当事業所としては、今精一杯の状態ではあるが、利用者からしてみればまだまだ足りないといったところで、取り組むべき課題であると思う。

利用者が新しい体験をする取り組み

～ 季節を感じ、楽しみを求めて ～

都道府県：石川県

会員施設名：青山彩光苑ライフサポートセンター

発表者氏名：橋本 拓也

I. 実践の目的・ねらい

当施設には、長年施設生活を送り重度の障害の為に制約が多い生活を強いられている方がいる。今回、知的障害又は重度身体障害により集団活動への参加が困難な20代～60代の男女計17名を対象とし、『施設の中では得られない体験を通じて季節を感じる』『新しい体験により刺激を感じる』事を目的とし施設外で初めての体験をして頂く取り組みを行なったので報告する。

II. 実践方法・取り組んだこと

四季を感じる事が出来る時期を選び、年に3回実施、参加者はそれぞれに選定した。

①『電車に乗って花見に行こう！(4月)』

参加者は電車に乗る経験が少なく、会話は可能であるが、他者と協調して行動をする事が苦手。地域ローカル線を利用し桜の名所まで外出。車椅子使用のため事前に駅に協力を依頼。ボランティア調整も行った。また、体力を考慮し電車移動は片道に限定した。

②『海遊びをしよう！(7月)』

参加者は立つことができ、感覚刺激を好み反応がみられる利用者。利用者家族に海遊びができる場所を紹介してもらい、介助等でも協力してもらった。

③『公園で遊ぼう！(10月)』

参加者は重度知的障害でコミュニケーションできない利用者。自然の中で公園内を散歩し、芝生に触れた。表情や言語から反応を読み取ることは難しいため、唾液アミラーゼモニターでのストレス評価を活用し、支援前・支援後のストレス値を測定比較した。

III. 実践の結果

①桜の花や風景を見て季節を感じながら、駅員や引率ボランティア、観光に来ていた方々に声を掛けられるなど職員以外との関わりがあり、利用者にとって刺激となった。初めての電車に笑顔の利用者がおられる一方、普段は活動的で多弁な利用者が緊張した表情で職員の手をずっと握ったままの等様々な反応が見られた。

②海水に足を付け砂の感触や波の感触が刺激となり楽しそうに声をあげて喜んでいた。一方、海水の冷たさや迫力で動きが止まってしまう利用者もおられたが、いずれにしてもまた来たい、今度は座ってみたいとの声が聞かれた。

③戸惑う様子が当初見られたが、時間と共に自由に車椅子を自走したり、芝生の上に座り好きな玩具や芝生に触れていた。笑顔が見られ、リラックスしている様子が伺えたが、ストレス値の測定結果では日常よりも高い結果となった。

IV. 分析・考察

施設外での新しい体験により、普段みられない笑顔や緊張した表情、行動がみられた。さらに、地域とのふれあいに喜ばれる利用者があった。一方、重度でコミュニケーションが困難な方を対象とする場合、ストレスを高める結果にもつながった。この経験を踏まえ、障害特性によって初めての体験が良い刺激・悪い刺激の両方に働くことが気づかされた。障害を個性とし、その利用者にあった支援を模索しつづけ、提供していくことが大切と考える。今後も反応や表情の観察を行ないながら、その方にあった新しい体験をする支援を考案し提供していきたい。

※事例等の使用は利用者本人（家族）の承諾を得ています。